５．大阪商業大学での起業教育取組紹介

①第15回 全国高等学校ビジネスアイディア甲子園



全国高等学校ビジネスアイディア甲子園は、「世に役立つ人物の養成」を建学の理念とする大阪商業大学が、社会の変化に対応し、自立した人材育成の場として2002年に創設しました。今回は164校から8483件の応募があり、アイデアの概要や思いついたきっかけ、従来品との違いなどを記した応募書類をもとに１次審査、２次審査を経て、書類審査とプレゼンテーション審査による最終審査となりました。最終審査では６名による考案者が５分間のプレゼンテーションを行い、新規性や着眼点、実現可能性、市場性とともに表現力なども総合評価して10人の審査員が審査しました。

また、最終審査・表彰式では、江崎グリコ株式会社 グループ広報部部長 江記念館館長 岡本浩之氏、グループ人事部キャリアサポートグループグループ長 相川昌也氏から「挑戦し続けるグリコの創意工夫 」と題して記念講演を行いました。

表彰式後には、全国から集った高校生同士が交流する場として、江崎グリコ株式会社にご協力いただき、『～おいしいプログラミング～「グリコード」を使って競争しよう！』をテーマにポッキーやビスケットなどを使用して、楽しみながらプログラミングを学習できる機会となり、交流を深めました。

最終審査・表彰式並びに交流会の運営は、在学生を対象に行う「大商大ビジネス・アイディアコンテスト」を行ってきた経験などをいかし、学生10人が担当しました。

受賞作品

■グランプリ

愛知県立豊橋工業高等学校３年　グループ名：じょろーん

吉田 純さん（写真右）　成瀬 三志郎さん（写真左）

受賞作品タイトル 「キャッチリトリ」





ちりとりでごみを取ろうとしても細かいちりが取り切れない――掃除当番をしていた時のそんな経験から、取り残さないちりとりの考案に取り組んだ。まず観察の結果、原因は床とちりとりの先端の間に隙間ができるためと判断。通常、ゴミをとる時は取っ手を少し上げて床との間に角度をつけるが、最適角度は24度と割り出したうえで、先端に薄いフィルムを貼って凹形や凸形、波形などさまざまな形状で実験を繰り返した。その結果、内側に湾曲した形状が、傾斜角24度を維持できるうえ、両側からこぼれないため、最も取りこぼしが少ないことが分かった。さらに、プラスチック製のちりとりは射出成形で作られているため、型を作って生産すれば安く大量に作れると、製造コストにまで言及した。成瀬さんは「実験もプレゼンもやり切った」と満足そう。吉田さんは「昨年は先輩がグランプリを取っており、連覇すると宣言していたのでホッとしました」と笑顔を見せた。

■準グランプリ

広尾学園高等学校（東京都）1年

白川 和希さん

受賞作品タイトル「やわらかプラグ」



問題意識を持ったきっかけは、コンセントに差し込みっぱなしのプラグにほこりがたまり、トラッキング現象によって発火、火事につながるというニュースを見たこと。自宅を調べるとコンセントが20カ所もあり、中には手が届かない所にも。プラグを差し込んだ時にコンセントとプラグの間に隙間がなければ同現象は起きないと思いついて考案したのがこれ。軟らかくて低反発な素材でプラグのカバーを作り、カバーを大きくすることで、しっかり差し込んだ時に軟らかい素材がコンセントごと壁に密着し、ほこりが入るのを防ぐ構造。白川さんは「応募は学校の宿題でした。アイデアはすぐ思いついたけど、すごく緊張して、準グランプリを取れるとは思いませんでした」と話した。

■準グランプリ

富山県立富山北部高等学校2年

古瀬 愛さん（写真右）

受賞作品タイトル「棚付き買い物カゴ」



スーパーで陳列順に品物を買い物かごに入れていくと、最後に並んでいるのが飲み物。重いペットボトルを上に置くと、軟らかい野菜やパンが潰れてしまう、入れ直すのも面倒――そこで考えたのが、取り出し式の棚をかごにセットすることだった。アクリル板をかごの幅の狭い方の外側にぶら下げるだけ。ペットボトルを乗せる時は、かごとの接点を基点に回転させる。ストッパーを付ければ板が浮いた状態で止まり、別の商品にボトルの重量がかかることはなく、アクリル板に折り返しを付けておけばボトルがぐらつかない。「母にも協力してもらって、試作品をたくさん作りました。アクリル板をいかに強くするかを一番考えました」と古瀬さん。

■審査員特別賞

大阪府立登美丘高等学校1年

米田 脩人さん

受賞作品タイトル

「グラウンドの整地用機械」



岡山県立倉敷商業高等学校1年

宮田 幸佳さん（写真左）

受賞作品タイトル

「シャパシャパ筆たく機」



徳島県立辻高等学校3年

グループ名：中川　麗

寺尾 麗さん（写真右）

中川 桃華さん（写真左）

受賞作品タイトル

「ロケット化粧品」



■学校賞　10校

富山県立富山北部高等学校

岐阜県立岐阜商業高等学校

愛知県立一宮商業高等学校

京都府立京都すばる高等学校

大阪市立大阪ビジネスフロンティア高等学校

大阪商業大学高等学校（大阪府）

兵庫県立伊丹高等学校

岡山県立岡山東商業高等学校

岡山県立倉敷商業高等学校

松江工業高等専門学校（島根県）



■記念講演

「挑戦し続けるグリコの創意工夫」

江崎グリコ株式会社
グループ広報部部長　江崎記念館館長
岡本浩之氏
グループ人事部キャリアサポートグループグループ長
相川昌也氏





「グリコ」が生まれたきっかけは、創業者の江崎利一が地元佐賀の浜で漁師がカキを煮ているのを見たことです。煮汁を調べたところ、グリコーゲンが高濃度で存在することを確認。腸チフスにかかった長男にグリコーゲンのエキスを飲ませたら回復したことから、お菓子に入れることを考えました。商品化に際しては、その頃お菓子の代名詞だったキャラメルと差別化するため、箱を赤にして、今も続くゴールインマークを付け、形もハート形にしました。「一口300メートル」のキャッチフレーズも斬新でした。1922年に大阪に出てきた後もおもちゃを付けるなど工夫を続け、これまでの生産量は55億個にのぼります。江崎グリコは置き菓子という新しいコンセプトの「オフィスグリコ」を売りだし、大きな柱に育っています。会社の事務所にお菓子を入れた専用ボックスを置いてもらい、食べた分だけ代金を箱にいれてもらうシステムです。社内の強い反対の声を入念なリサーチと準備で押し切って始めたのですが、30～40代の新しい顧客層を掘り起こし、代金回収率は95%にのぼります。新しいことをやろうとしたら、人に対して熱くなれ、働きかけを惜しまなくなります。そういう人が複数いれば組織を巻き込む力になります。困難に直面したら、ぶれない軸足に立ち、チームでとことん議論すること。オフィスグループはそうした取り組みで、第1回日本サービス大賞優秀賞を受賞しました。

■交流会

『～おいしいプログラミング～「グリコード」を使って競争しよう！』



江崎グリコは、ポッキーやビスコなどのお菓子を使って、プログラミングを学べる小学校低学年向けのスマートフォン用アプリ「グリコード」を開発。表彰式後の交流会で、岡本さんらが実演されました。総務省が推進する「プログラミング教育実施モデル実証事業」に選定され、小学校でグリコードを活用した授業を展開する予定。



■審査講評

審査員長
大阪商業大学経済学部
柴田孝 准教授

最終審査作品は、生活シーンに密着し、見過ごされがちな点を掘り下げた作品が多かった。プレゼンもよく準備されていた。グランプリのキャッチリトリは真面目に考えたのが面白い。どうすれば課題をクリアできるかを粘り強く考えたことがよく分かった。準グランプリの2点も試作を重ねて実用化に結びつけた点が良かった。ビジネスアイディア甲子園はコトやサービスも対象にしており、今後、こうしたジャンルの作品も出品されることを期待したい。

■学生スタッフのみなさん

「大商大ビジネス・アイディアコンテスト」の入賞者等で構成する学生運営委員会メンバー。学生自身の経験を活かして最終審査・表彰式の運営に携わることで、自分自身の成長と委員会の団結力を深める貴重な機会となりました。

